八木義徳

# 命三つ

# 命三つ

八木義徳

福武書店

八木義徳（やぎ・よしのり）
一九一一年、北海道室蘭市に生まれる。早稲田大学仏文科卒。四四年、「劍広福」で第一九回芥川賞を受賞。七六年、「風祭」で読売文学賞を受賞する。著書として他に「母子鎮魂」「私のソーニャ」「摩周湖」「一枚の絵」「遠い地平」「家族のいる風景」などがある。

命（いのち）三つ

一九八七年二月一〇日　第一刷印刷
一九八七年二月一六日　第一刷発行

定価一五〇〇円

著者　八木義徳
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒一〇二　電話（〇三）二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　図書印刷
平板印刷　栗田印刷
製本所　小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

© Y. Yagi 1987
ISBN4-8288-2220-8 C0093
NDC913 194 240p

命三つ　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

遺品 7
命三つ 35
贈られた声 71
花火 117
海の文学碑 161
立像 191

装丁　田村義也

# 命(いのち)三つ

遺

品

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

今年の五月末頃、私の郷里である北海道のM市に在住するH氏から、六十円の切手を二枚貼ったかなり部厚い封書が送られてきた。

中から便箋一枚の手紙と、そして四百字詰めの原稿用紙八枚に書かれた随想風の文章のコピーが出てきた。

お元気のことと存じます。

早速ですが、私の小学校友達が語ってくれたのを、一文に纏め、最後に先生の文を借用致しました。もしお許し出来なければ、その旨、お申しつけ下さい。

不遜なこと十分に承知していますが、お許し願えれば有難いです。

先はお願いまで。　H拝

こういう文面の余白に、追記として「お許し願えた上でのことですが、文章にまずいところがありましたらご垂示賜りたく」という言葉が書かれていた。

ともかくも私は、その「ベロアの帽子」と題した八枚の文章を読んでみた。

H氏の小学校時代の同級生のなかにS君というのがいた。当時S君の家は貧しかったので、朝、登校前に納豆売りをして家計を助けている孝行息子だった。が、その反面、彼は天才的ともいうべき話術の持主で、学校の授業時間の合い間には、奇想天外な作り噺をしてきかせるのでクラスの人気者でもあった。

そういう評判をだれからか聞いたのか、ある日担任の教師が突然彼を指名して「何かおもしろい話を一つ聞かせてくれ」といった。S君は臆する色もなく教壇に登ると、まるで講談師みたいな語り口で、身ぶり手ぶりをたっぷり混じえた民話風の怪異譚を一席弁じて、クラス全員の喝采を博した。担任の教師はそれから時々彼を壇上に立たせては話をさせたが、彼の話は幽霊噺ばかりではなく、ときに豪傑譚、ときに英雄譚、ときに孝行娘の哀話など、そのつど話題が変るので、S君が壇上に立つと、こんどはどんな話を聞かせて

くれるのかと、クラス一同固唾をのんで待ちうけたものだという。

（これは後年のことだが、ある日H氏がS君の家を訪ねて昔話になったとき、小学生のころ、きみはどうしてあんなにたくさんの話を知っていたのかと質ねると、家が貧乏で本なんていうものは一冊も買ってもらえなかったのだから、ぼくの話は本でおぼえたものじゃない。ただ母親が話好きな女で、夜寝る前、子供たちを集めて「むかし、むかしなぁ……」という前置きでいろいろな話をしてきかせてくれた。その話のあら筋だけはおぼえていて、あとは自分勝手に尾ひれをつけて、話らしい話をでっち上げただけさ、とS君は笑いながら答えたという）

そのS君は、大正十三年の春小学校を卒業するとすぐ街の理髪店に住み込んで徒弟奉公をすることになり、H氏は市内の商業学校に入学する。そして永い時間が流れた。

現在、S君はM市の中心街ともいうべき中央町の大通りに二階建て鉄筋コンクリートづくりの立派な店舗をかまえ、つい先年まで理髪業組合の理事長という肩書を持つ人物となり、H氏は父の家業である紙店を継いで、市の商工会議所議員のほか商店会の幾つかの重要な役割をつとめるかたわら、市の文化連盟理事や、地方史研究会の副会長や、市史編集員などの肩書を持つ人となっている。

――H氏の随想はまたいきなり時間が飛んで、今年の正月のことになる。

松の内のある日、H氏はS君の家を訪ね、居間のストーヴを囲んで雑談をしているうち、どういう話の弾みであったか、いまは亡き高峰病院の院長の思い出話になった。

(ここで急いで註釈をしておかなければならないが、このH氏とS君との話題となった高峰病院の院長、高峰好之というのは、私の実の父である。しかし私の母は芸妓で好之のいわば〝蔭の女〟であったから、その子である私は高峰好之の庶子ということになる)

高峰病院とS君の勤める常盤理髪店とはちょうど背中合わせという位置にあったから、院長の理髪は二階建ての病院の建物と細長い廊下でつながった母家(おもや)へ常盤床の主人が出張して行うというのが慣例になっていた。が、ある時主人が急な病気になったため、一番弟子のS君が代理で出かけることになった。女中の案内でS君の通されたのは、天井の高い洋風の書斎であったが、その三方の壁にはどっしりしたマホガニーの書棚が置かれ、そこに専門の医学の原書ばかりでなく、哲学や文学や科学や宗教関係の本などがぎっしり詰まっているのにまず度肝をぬかれたという。

院長の理髪はその書斎の床に油紙を敷き、背の高い肘掛け椅子を利用して行われた。そのS君の理髪職人としてのすぐれた腕前が買われたのか、以後は常盤床の主人に代ってS

君が名指しで呼ばれることになり、やがてはその腕前ばかりでなく、質朴で明るい性格と機転のきく頭のよさが気に入られて、「仙造、仙造」と親しく名前で呼ばれるようになった。

S君（ほんとうはもう仙造君としなければならぬところだが、H氏の文章にならってS君とする）の高峰院長に関するさまざまな思い出のなかで、こんにちでも忘れられぬ最も感動的なものとして、次のようなエピソードをH氏に話してくれたという。

――たしか昭和六年の秋のはじめ頃、当時M市から汽車で四時間もかかる日高支庁静内（しずない）のある薬屋の娘さんが脳の病気で高峰病院に入院して手術をうけることになった。その手術の日、S君は院長に呼ばれて娘さんの頭を剃った。剃り終ると、院長は何を思ったか、S君に書斎で待っているようにと言った。

手術にはおそろしく永い時間がかかった。たぶん二時間ほど経ったころ、院長がやっと書斎に姿をあらわした。さすがにながい手術の緊張で顔に疲労の色を濃くただよわせた院長は、肘掛け椅子に深く体を沈めると、手をひたいに当て眼をつぶったまましばらく無言でいたが、やがてS君に命じて机の抽出しから一本の太い百匁蠟燭を取り出させると、それを机の上に立てて火をつけた。

そろそろ宵闇のせまりはじめた書斎に一点の明るい光が輝いた。

「人に光をあたえながら、己の身が融けてゆく。医者もこの蠟燭とおなじだな」

院長は静かな声でいった。それからS君の方へ顔をむけて、「いや、医者ばかりじゃない。お前も剃刀と鋏で一生を生きて行くのだろうが、この蠟燭の気持を忘れぬようにな」といった。

その時、S君は為体の知れぬ感動で、思わず眼から涙があふれ出したという。

そうして、これはあとで病院の事務長をしているNさんという人から聞いた話として、S君はまた次のようなエピソードを語った。

脳の手術をした娘さんはその後何十日かの入院生活をしたのち、いよいよ退院ということになった。その前日、高峰院長は娘さんとその両親の三人を、M市でいちばん大きいブラザー軒というレストランに招いて、食事をともにした。

外科手術のなかでは最もむずかしいといわれる脳の手術がさいわいに成功した。そのことで自分は外科医としての技術に自信を持つことができた。その自信をあたえてくれたのは、ほかならぬ患者の娘さんのおかげなのだから、感謝の意をこめての招待であったという。だから、患者の手術料や入院費などは一切受け取らなかったばかりでなく、親子三人



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c